

## 展望

### 次世代のさらなる飛躍を期して

学長 鈴木 志津枝



神戸市看護大学は、1995年1月の阪神淡路大震災の翌年である1996年4月に開学して2016年3月で20周年を迎えました。近年、わが国の高等教育を取り巻く環境、さらに医療・看護を取り巻く社会環境は大きく変わりつつあります。

今日の少子超高齢社会の進展の中、質の高い大学教育を基盤として、高度な看護実践を提供できる看護専門職者の育成や社会貢献に対する社会の要請にこたえていくことがますます重要になってきています。

地域社会の中で本学が魅力ある看護大学となるために、重点項目として、学生が主体的な学習者となる支援の一環としてラーニングコモンズ(図書館内設置のグループ学習用会議室)の増室、高校生から大学生活へのスムーズな移行のためのスタートアップセミナーや情報リテラシー教育等を進めています。また、質の高い看護専門職の育成のため、教育内容の見直し、アクティブラーニングの導入、シミュレーション教育、チューターの導入等を行うとともに、3つのポリシー(アドミッション、カリキュラム、ディプロマ)の各ポリシー)の達成に関して自己点検・評価と改善を継続的に進めています。さらに魅力ある大学院をめざして、2016年度より助産学実践コースの設置(助産学専攻科からの移行)、博士後期課程における

共通基盤科目として研究方法科目の充実や英語論文作成演習科目の配置など、大学院科目の充実も進めています。

神戸市看護大学が独自に行っている地域貢献活動に加えて、2013年度から文部科学省の助成事業の「地(知)の拠点整備(COC)事業」の取り組みを行ってまいりましたが、2015年度に地域貢献、教育、研究、組織運営の視点から中間評価を実施しました。2016年度以降、成果を上げている点や改善を必要とする点も含めて、取り組みをさらに充実していきたいと考えています。

本学は前述しましたように、開学20周年を節目の年を迎えます。神戸市にある大学として存在意義を示していくために、20周年記念事業の一環として卒業生や修了生、地域の看護職との交流の強化をめざして、同窓会との連携強化や看護学会の設立に向けて準備をしています。卒業生や修了生の皆様には、学部教育や大学院教育、後輩の教育に大きな貢献を果たしていただいておりますが、次世代に向けてさらに飛躍をしていくために、本学と卒業生との絆の強化に努めていきたいと考えています。

神戸市看護大学は教職員の叡智を結集して、さらに発展できるよう努力してまいりますので、今後ともご支援のほどをよろしくお願いいたします。

### 開学20周年を来年度に控えて

副学長 二宮 啓子



本学は、平成8年4月に開学し、平成28年4月に開学20周年を迎えます。開学20周年を記念して、2つの20周年記念事業の準備を進めています。1つは、20周年記念式典の開催です。もう1つは、20周年

記念誌の作成です。それぞれの記念事業のプロジェクトチームを作り、20周年記念式典の企画は副学長の私がリーダーとなり8名の教職員で、20周年記念誌の作成は図書館長の松葉教授がリーダーとなり8名の教職員で進めています。

20周年記念式典は、平成28年10月29日(土)に開催します。20周年記念式典は二部構成になっており、一部として記念式典、二部として記念講演とシンポジウムを開催します。一部の記念式典では、神戸市看護大学の20年のあゆみを写真で綴るスライドショーを行う予定です。二部の記念講演では、昭和39年に開設された神戸市立高等看護学院から神戸市立看護専門学校、神戸市立看護短期大学を経て神戸市看護大学へと引き継がれてきた「神戸市の

看護教育」について、神戸市立高等看護学院教務主任、神戸市立看護専門学校校長、神戸市立看護短期大学副学長を歴任された高橋令子先生にお話し頂きます。その後、「神戸市看護大学の看護学教育とこれからの大学に期待すること」について、臨床や地域、教育で活躍している学部卒業生、大学院修了生をシンポジストにお迎えし、シンポジウムを開催する予定です。

20周年記念誌では、この10年間の大学のあゆみについてまとめるとともに、定年退職された教授、学部卒業生、助産学専攻科修了生、大学院修了生から思い出などの寄稿をいただきます。また、同窓会長、学部卒業生、助産学専攻科修了生の方をお招きして、「神戸市看護大学の未来」について、各学年の在学生や学長とともに自由に語りあっていただく開学20周年記念の座談会を開催し、その記録も掲載したいと思います。

開学20周年の節目の年に、この10年間の本学のあゆみを振り返り、開学30周年に向けて、神戸市看護大学のさらなる発展への新たな一歩が踏み出せるように準備していきたいと思っています。



## 助産学専攻科が大学院に変わります！

高田 昌代(健康生活看護学領域 ウィメンズヘルス看護・助産学分野 教授)

妊産婦や赤ちゃんはどのような助産師を必要としているでしょうか。常にこの視点に立ち、私たちは助産師教育をしてきました。本学は2005年度より全国に先駆けて大学専攻科を設置し助産師教育を行って来ました。当時、4年制大学内で助産師教育を行う大学が多数派の中、助産学専攻科の設置は、助産師教育の次の時代を見越しての大きな決断でした。この決断はその後の我が国の助産師教育を大きく変えたと思います。

10年後の今日、日本の周産期事情は大きく変化しました。平均出産年齢は30歳を超え、かつて30歳以上の初産婦の母子健康手帳に「高」を押印してリスク管理していた時代は遠い昔となり、40歳代の初産婦さんに出会う頻度も低くありません。これまで妊娠・出産が叶わなかった合併症のある女性についても、医療の進歩がこれを可能にしています。このような近年の周産期事情は、妊娠・出産がハイリスクになってきたということをも同時に意味しています。妊娠・出産を希望する女性が誰でも、安全にそして安心してお産ができるために、助産師は高度な臨床的課題にも対応できなければならない時代になりました。

元来、子どもが育つ、子どもを育てることは楽しいことであり、楽しいからこそ宮々と続いてきたとも言えます。しかし、近頃では、産後うつや児童虐待、貧困など、「楽しい」からほど遠い状況も頻繁に目の当たりにします。人生が長くなり、自助努

力が声高に言われる時代に、思春期から更年期、老年期まで、女性が健康に生きるために考えなければならないことも多くなりました。また、わが国に外国人登録者が増え、臨床現場でも異文化理解の必要性が急激に増えています。経済情勢を背景にすれば、高度経済成長、その後の不況もたらした諸問題は、女性や子どもといった弱い者への影響が大きく、課題は多様化・複雑化しています。様々な分野において、女性のエンパワメント(内なる力)を信じ、ウェルネスを大事にした対応と同時に、医療機関だけでなく地域においても、グローバルに、かつ政策にも目を向けて行動できる視野の広い助産師の養成が期待されています。

この期待を担って、2016年度より本学助産学専攻科は、大学院「助産学実践コース」(2年間)に移行し、病院、診療所、助産院、保健センター、NPO、そしてラオスでも学ぶ特別なカリキュラムを開始します。優しい手と鋭い目を持ち、的確な判断力と科学的かつ伝統的な技を身につけた高度実践専門職としての助産師の育成を大学院で行なっていきます。



プレパレマセミナーの実施

## キャリア支援室を開設しました！～進路の見極め・就職活動支援に向けて～

学生部長 石原 逸子(基盤看護学領域 基礎看護学分野 教授)

平成27年4月より、本部研究棟2階にキャリア支援室が開設されました。キャリア支援室設置の趣旨は、進路への適性とキャリア発達の観点から学生を支援するとともに、学生の就職に関する意向の把握や就職活動や就職先の相談に応じ、さらに教職員との連携を図りながら学生の就職活動を全般的にサポートすることです。看護職経験のある職員が専任で、週4日(月～木)の9時～17時に常駐し、学生の進路・就職に関する相談に随時対応しています。将来的には、在籍中の学生ばかりでなく、卒業生の就職に関する相談やキャリア支援も目指しています。以下、キャリア支援室設立の経緯とその後の活動について簡単にご紹介します。

平成26年までは、学生委員会のメンバーや事務職員による就職先候補病院等からの求人対応をしていました。その結果、就職情報の収集と提供が断片的で統一した内容ではありませんでした。学生のインターンシップの実施状況についても、担任教員もしくは看護研究指導教員が把握し、学生部長に報告する状況でした。学生たちからは、看護経験豊かな職員からのアドバイスが欲しい、就職相談の専門窓口がほしい、等の希望が出されていました(平成26年度看護師の「就職活動」に関するアンケート調査より)。

キャリア支援室開設後は、神戸市の病院や神戸市以外の病院の求人情報がキャリア支援室に集約され、学生たちにとって有意義な就職情報として提供され活かされるようになりました。学生たちは、病院選択の方法や書類の書き方などの相談に訪れ(4月～翌年1月下旬までに延べ85件)、それにより、

積極的にインターンシップに参加する学生たちが増加しました。また、12月に進路への適性支援によるキャリア発達を促すことを目的に、就職説明会・国家試験対策・進学ガイダンス合同会を3年生対象に実施し、就職を考えるきっかけをつくりました。さらに、4年生の就職(内定)情報をクラス担任や学生委員会がタイムリーに情報交換できるようになり、組織が一体となって学生の就職活動をサポートする体制が整いつつあります。

来年度の課題は、卒業生の動向を把握し、卒業後のキャリアアップや転職相談への対応、就職に関して課題を抱えている学生への個別支援等、より充実した活動が行えるよう継続して取り組む予定です。



就職活動をサポートします！(キャリア支援室 竹橋 美由紀先生)



## カリキュラムと看護学実習について

看護学実習運営委員長 池田 清子(療養生活看護学領域 慢性病看護学分野 教授)

看護学実習の目的は、さまざまな健康レベルや発達段階にある個人と家族、集団を対象として、生命の尊厳を感受し、深い洞察力と豊かな想像力に根ざした倫理観を養うとともに、看護専門職を目指す者としての自覚と責任のもとで、多様な対象者の個別性に対応できる看護実践能力を養うことです。これらの能力は、1)看護実践の基盤となる能力、2)対象者の特性に応じた支援能力、3)組織開発能力から構成され、本学ではこれらの能力を段階的かつ一般的に学習できるように実習が組み立てられています(図1参照)。ここでは、平成24年度から実施され、今春完成年度を迎える新カリキュラム下での実習の構成を紹介します。

基礎看護学実習(3週間)では初めての臨床実習で患者を受け持ちます。健康生活支援学実習(2週間)は、大学周囲の地域(神戸市西区、須磨区)で生活する人々と関わる中で健康問題を考える実習です。3年生後期から4年生前期には、対象者の特性に応じた支援を学ぶために、ウイメンズヘルス看護学実習(2週間)、小児看護学実習(2週間)、老年看護学実習(2週間)、精神看護学実習(2週間)、地域・在宅・訪問看護実習(2週間)、周手術期・クリティカルケア実習(3週間)、慢性病看護学実習(2週間)が開講され、それぞれの実習ごとに患者(利用者)を受け持ちます。4年生の7月末から8月初旬には実

習の総仕上げとして総合実習(3週間)があります。この実習は学生が希望する領域で行い、看護チームの中に入って看護を実践します。また、編入生では、看護管理学実習(1単位)があります。なおこれらの看護学実習では領域ごとに継続看護や多職種連携の視点を組み入れることにより、地域包括ケアシステムの中での看護師の役割についての学びを強化しています。

また平成24年度からの新カリキュラムでは、保健師課程を選択制として学内選抜された20名のみを対象とした2つの実習科目が開講されました。このうち公衆衛生看護学実習I(1週間)は産業保健に関する実際を学び、公衆衛生看護学実習I・II(4週間)では保健センター(区役所)にて、公衆衛生看護活動の実際と保健師の役割を理解することをねらいとしています。

図1. 看護学実習の年次計画

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
2年次	慢性病 クリティカルケア						基礎	健康 生活				
3年次	地域・在宅 小児 老年			精神		公衆衛生 I・II		管理 実習				
4年次	クリティカルケア 慢性病 地域・在宅 精神-老年-小児 ウイメンズヘルス			総 合		慢性病 クリティカルケア 地域・在宅 小児 老年 精神 ウイメンズヘルス						

※但し、保健師課程選択の学生は、3年生の3月と4年生の9月に保健師課程に必要な実習が5週間入ります。

## 保健師教育の充実に向けて～保健師選択課程1期生が卒業します！

都筑 千景(健康生活看護学領域 地域・在宅看護学分野 教授)

平成24年度の入学生から、それまで全員に行ってきた保健師教育は20人の選択制になりました。この背景には、昨今の社会情勢の変化に伴い、感染症や災害などの健康危機、児童虐待、そして貧困や格差など複雑な健康課題が増えたことがあります。地域で働く看護職である保健師には、そのような健康課題に立ち向かえる高度な実践能力が求められています。そのため、平成23年から保健師の修業年限が6か月から1年に延長され、必要な単位数が増加される等、教育内容の強化が図られることになりました。これまですべての看護系大学で看護師と保健師両方の養成が行われていましたが、今では多くの看護系大学は選択制になっています。また、学部で保健師養成は行わず、大学院修士課程で行う大学も少しずつ増えてきました。

本学の選択制による保健師課程は、今年初めて卒業生を送り出します。保健師課程を選択した学生は、本学を卒業するために必要な128単位に加え、保健師必修科目をプラスした合計140単位以上を修得する必要があります。また、公衆衛生看護学実習は計5週間、春休みや夏休みの期間に実施されます。それでも「保健師を目指す」と決めた学生たちは、忙しい時間をやりくりしながら、この4年間一生懸命取り組んできました。

写真は、保健師必修科目の一つである公衆衛生活動論Ⅱにおける演習の場面です。本学で実施している「まちの保健室」に参加し、地域住民と協働した健康づくり活動を運営します。学生は、これまでも教育ボランティアさんやCOCコラボ教育などを通じて、地域の方々から学ぶ機会はありませんでしたが、この課程の演習では、運営側の一員として活動し、地域で実施する事業の意義と看護について考えることとなります。まさに本学ならではの、地域の中で地域の人と共に学ぶ実践型の学習であるといえます。このように、地域の人たちから多くを学び、過密なスケジュールを立派にこなした経験は、きっとこれからみなさんが成長していく糧になってくれるでしょう。本学の保健師選択課程1期生として保健師のライセンスを活かして活躍されることを期待しています。



ストレッチをしています



骨密度測定の様子



## 様々なテーマで取り組む研究演習

渡邊 定博(専門基礎科学領域 医科学分野 教授)

4年生は「研究演習」という科目(いわゆる卒論)を1年間に渡って履修します。今年度からは看護系以外の教員もこの科目を担当することになりました。配属された教員によっては看護とは異なったテーマに取り組むこともあります。

私のところでもいくつかのテーマで卒論指導をしています。そのひとつとして人体模型のデジタル化に取り組まれました。解剖学の講義でよく使われる人体模型を、3次元スキャナーを使ってデジタル画像に変換し、パソコンの画面上で立体表示するという内容です。

本学には短期大学時代から引き継いだ様々な人体模型がありますが、講義の時間内ではなかなか有効に活用できていないのが現実です。そこでこれらの人体模型をデジタル化して、大学のホームページ上に掲載することで、いつでも学生が利用できるようにしたいというのがひとつの狙いです。

今回は、今年の4年生が取り組んだ骨格模型のデジタル化の例をご紹介します。図1は背骨のひとつである腰椎の3次元画像です。モデルは画面上で回転させたり拡大縮小させたりすることが自由にできます。図2はこれを上から見た図ですが、複雑な突起や椎孔(矢印:脊髄が通る孔)の様子がみごとに再現されています。

3次元スキャナーは、レーザー光を物体に照射しその反射光の形から立体像を作成します。ところが椎孔の内壁には外側からレーザー光を当てることができないため、孔の内壁を再現することができません。そこで、孔に樹脂を流し込んで椎孔の鋳型を作成し、その鋳型をスキャンした形を椎骨の全体像からくり抜くことにより、椎孔を正確に再現することができました。

このように模型の種類によってさまざまな工夫をしながら、デジタル化の作業を行っているところです。この他にも、肩関節周辺の骨(図3)、股関節周辺の骨(図4)、膝関節の骨(図5)などを作成しました。いずれの模型もリアリティの高い模型で、講義でも十分に活用できます。

今後も研究演習のテーマとして、学生と一緒にいろいろな人体模型をデジタル化していきたいと考えています。将来的には、本学所有の人体模型をすべてホームページ上で閲覧できるようにしたいと思っています。

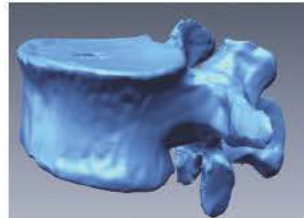


図1: 腰椎の3次元画像

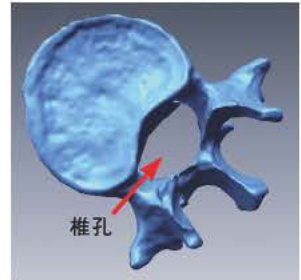


図2: 上から見た腰椎像

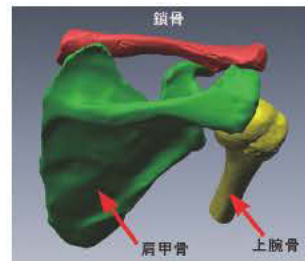


図3: 肩関節周辺の骨



図4: 股関節周辺の骨



図5: 膝関節周辺の骨

## 国際シンポジウム「変異」

(11月18~20日、ストラスブール大学)に参加して

松葉 祥一(人間科学領域人文科学分野 教授)

2015年11月18日から20日にかけて、フランスのストラスブールで開催された国際学会「変異——ジャン=リュック・ナンシーをめぐって」に出席したので、その一部を紹介したい。

ストラスブール大学と国際哲学コレージュの共催で行われた同学会は、11月13日にパリ襲撃事件が起こったことで、開催が危ぶまれたが、こういふときこそ共に思考すべきことがあるという呼びかけのもと、今回の事件もテーマに加えて実施された。ジャン=リュック・ナンシー(1940年-)は、現代フランス思想を代表する哲学者であり、そのほとんどの著作が日本語に訳されている。

初日は、予定を変更して、パリ襲撃事件に関する全体討論が始まった。暴力に対して思考はどのように対決しうのかという参加者の問いかけに対して、ナンシーは、思考に抵抗するものを思考することでしか哲学は始まらない、暴力に対して思考することこそ哲学の役割であると応答し、会場は熱を帯びていった。ヴェルナー・ハーマツハーの基調講演は、ナンシーにおける「共存」と「変異」の関係をめぐって、ナンシーと他の思想家との位置関係を明確にした。西山雄二は、ナンシーのヘーゲル読解に読み取れる現代性を強調、ポイアン・マンチェフの発表は、ナンシーの思想に隠れて





ジャン・リュック・ナンシー氏と筆者

いるエロス論を、ソクラテスからバタイユにいたるエロスの哲学の系譜に位置づける試みだった。ジャコブ・ロゴザンスキーはナンシーにおける神的なものを問い、ナンシーのいう「キリスト教の脱構築」の妥当性を根底から問うた。

市内書店での一般向けトークセッションや、博士課程の学生との座談会を含め、会場には連日100名近くが詰めかけ、予定時間を超える討論が行われた。いずれの発表もナンシー哲学の読解を行うというスタンスではなく、ナンシーの議論を新たに展開させるために、場合によっては根本的に批判することも厭わないものだった。また、すべてのセッションでナンシーが積極的に応答していたことも印象に残った。

学会の翌日、急きょ筆者は、ナンシーの自宅で、「現代思想」誌の「パリ襲撃事件特集」(2016年1月臨時増刊)のためのインタビューを行う機会が与えられた。同号には、この学会のロゴザンスキーの原稿なども収録されているので参照していただきたい。同学会の詳しい報告については、脱構築研究会のHPを参照(<http://www.comp.tmu.ac.jp/decon/cn6/pg122.html>)



ナンシー氏の自宅にてインタビュー中

## 神戸市看護大学第17回国際シンポジウム報告

# 精神疾患をもつ人々への在宅ケアシステム ～米国システムの紹介と神戸の現状～

加藤 憲司(専門基礎科学領域 健康科学分野 准教授)

去る2016年1月23日、本学主催の第17回国際シンポジウム「精神疾患をもつ人々への在宅ケアシステム ～米国システムの紹介と神戸の現状～」が、神戸市学園都市ユニティにて開催されました。基調講演の講師には、米国ワシントン州シアトルにあるUniversity of Washington看護学部精神看護学准教授の上月頼子(こうづき・よりこ)先生をお招きしました。

本学とUniversity of Washingtonは、2012年に「文化、教育、科学協力に関する学術協定」を締結いたしました。これまで必ずしも活発な交流ができていたわけではありませんでした。このたび、上月先生を国際シンポジウムにお招きできたことは、本学にとって大変意義のあることだと思います。しかも上月先生はかつて、本学の前身である神戸市立看護短期大学にて教鞭を執られた方であり、このようなご縁の深い方が先方におられることは、私たちにとってとても有り難いことだと感じております。

シンポジウムには、神戸市において在宅ケアを実践なさっている3名の方々にもパネリストとしてお越しいただきました。玉井光恵先生(神戸市こころの健康センター)は保健師、岡田美沙先生(みなとがわ訪問看護ステーション)は訪問看護師、そして中谷恭子先生(兵庫県立光風病院)は臨床心理士というように、異なる立場、異なる視点から、神戸の現状について語っていただくという目的でお招きしたものです。

合わせて3時間に及ぶ講演ならびにパネルディスカッションを通して、以下のようなことが明らかになりました。ひとこと言え、**「ケアというものは個々の国や地域ごとの歴史・文化が背景にあり、米国には米国の良さ、日本には日本の良さがある」と**いったところでしょうか。上月先生のご意見によれば、米国では医療者不足という問題が大きくクローズアップされており、その

対応策として、看護師が高度な実践の担い手となる、という方向へ進んでいるとのこと。一方、米国と対比して日本の特色と言えるのは、福祉の部分において、日本の文化の中で様々な職種がうまく組み合わさって、援助を必要としている方々のニーズを全体として捉えるようなケアを心がけている点とのこと。上月先生は、3名のパネリストの講演を聴かれた感想として、開口一番、「こっち(日本)の方がいいな」とおっしゃったのは、面白いと感じると同時に、明るい希望が持てるような気持ちにもさせてくれるご発言でした。

今回の国際シンポジウムをきっかけとして、本学とUniversity of Washingtonとの学術協定がいろいろな活動へと広がり、大きな成果を生むことができるかどうかは、私たちの奮起と努力に懸かっています。今後とも、実りあるご報告が引き続きできるよう、本学全体が一丸となって進んでいきたいと思っております。



(基調講演)上月 頼子先生



## 在学生から

### あざみ祭を終えて

高田 真次 (学部2年生)

今年のあざみ祭のテーマは“we 看 shine”でした。これには、規模こそ小さい大学ながらも学内生全員が看護学を専攻し、周辺に5つの大学がある学園都市に立地しているという強い独自性を持つ本学が、看護をもっとたくさんの人に知ってもらえるような楽しいことをしようという思いがありました。実際に本年度は「まちの保健室」とは別に、学生主催による市看ドックや市看カフェといった、来場者が健康について考える場を設けたり、気軽に休憩できる場所を提供したりするという企画を設けました。また、「5大学1高専連携プロジェクト」というものを周辺大学と協力し地域貢献活動を行ったり、あざみ祭を盛り上げるために外部からお笑い芸人やアーティストをゲストと呼びだしました。例年より様々なところでパワーアップしたあざみ祭でした。残念なことといえば当日雨が降ってしまい、思っていたよりも来場者が伸びなかったことです。しかし、それでも記念すべき20年目のあざみ祭で実行委員長を務めることができ、仲間とともに運営できたことは非常に達成感のあることで、私にとって貴重な経験になりました。

来年度はあざみ祭の時期が11月から5月へ大きく変わります。これにはいくつかの理由があります。1つには本学のカリキュラムの問題です。本学は夏の終り頃より、2年生には基礎看護実習が、3年生には様々な領域実習があり、4年生には2月に控える国家試験の勉強と、多くの学生が参加しにくい状況があることが挙げられます。日程は変わってしまい準備期間が短く大変かと思いますが、あざみの花は本来春の花ですから、5月開催になっても力強く芽吹いて、今年より面白いあざみ祭になることを期待しています。

最後に、運営を支えてくれた仲間や教職員の方々、あざみ祭を盛り上げていただいたすべての来場者様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。翌年度からもあざみ祭をよろしく願いいたします。



## 海外研修に参加して ～シアトルでの充実した日々～

長尾 怜佳 (学部3年生)

私は、この大学に入学する以前から、海外での最先端の医療技術に興味があり、この大学にある米国・シアトル看護学研修というプログラムに惹かれていました。今回念願かなってこのプログラムに参加することができました。

この研修はよく学び、よく遊んだ2週間となりました。平日は、医療・福祉制度や訪問する施設のセミナーを受けたり、2クラスに分かれてそれぞれ現地の先生に医療英語や英会話を学んだり、さらに多くの医療・福祉施設の訪問をしました。アメリカの中でもトップクラスのワシントン大学の医療センターや子ども病院、ハーバービューメディカルセンター(外傷性救急病院)を訪れ、最先端の医療を学び、どのように提供されているのかを学ぶ機会となりました。また、アメリカでは日本のような皆保険制度が整っていません。カントリードクターという保険のない方が差別なく医療が受けられる病院を訪問し、アメリカの医療の現状を知ることができました。ほかにもナーシングホームや介護付き住宅なども訪問しました。多くのことを学んだあとの帰り道や休日には友人とバスを乗り継いでさまざまな場所に行き、スペースニードルでシアトルの街並みを一望したり、ライドザダックという水陸両用バスで街を回ったり、ショッピングや食事など毎日が充実していました。

私は、1人暮らしをしている女性の家でホームステイしました。私の両親と近い年ぐらいの彼女は、とても料理が上手でアメリカから料理だけでなくメキシコ料理や中華料理、さらには日本料理まで作ってくれ、毎日のご飯がとても楽しみでした。また私が、少し帰りが遅くなった時には彼女はとても心配し、明日

から早く帰ってきてね、とわが子のように関わってくれました。翌日からは早めに帰り、お詫びにと花をプレゼントすると喜び部屋に飾ってくれ、そんなやりとりがシアトルに2人目の母親ができたような気持ちにしてくれました。また、彼女から実の娘の闘病のことやアメリカの医療制度に対する思いなど、実際にアメリカで生活している方の声も聴くことができました。

今回の研修を通して、2週間という短い間ではありましたが、異国の地で様々なことを知り、様々なことを経験し、自分がひと回り大きくなったように感じます。今後も看護の道を進んでいくうえで、今回の経験を活かして広い視野を持って人々に関わっていきたいと感じました。



ワシントン大学構内にて

2016年度から海外研修対象国にベトナム(学部)とラオス(大学院助産学実践コース)が加わります!



## 修了生から

## 老人看護専門看護師としての活動 ～急性期病院の臨床現場から

神戸市立医療センター中央市民病院  
老人看護専門看護師 花房 由美子

私は、2010年に神戸市看護大学大学院博士前期課程を修了し、神戸市立医療センター中央市民病院で勤務しています。現在、老人看護専門看護師になって5年が経過しました。

私の専門領域である老人看護専門看護師は、「高齢者が入院・入所・利用する施設において、認知症や嚥下障害などをはじめとする複雑な健康問題を持つ高齢者のQOL(生活の質)を向上させるために水準の高い看護を提供する」という役割があります。専門看護師の6つの役割(実践・相談・調整・倫理調整・教育・研究)を駆使しながら日々活動しています。

私は、現在一般病棟で主任として活動していますが、高齢者ケアでは日々悩むことが多々あります。急性期病院では、高齢者は、緊急入院や手術などでせん妄や認知症のBPSD(行動・心理症状)を発症したりします。そのような高齢者に、安全を守りながら安心や安寧をもたらす倫理的なケアを行うことは容易ではありません。しかし、多職種チームで力を合わせて、看護管理者やスタッフと共に少しでも良いケアができるよう日々奮闘しています。また、高齢者の生活機能を低下させないよう、ふだんの生活を伺いながら、生活を整えるケアを行っています。さらに、

超高齢者や認知症を持つ高齢者の治療や療養場所の選択においても悩むことが多々あります。その方の生活史を聴き、その方にとっての「最善は何か?」をご本人・ご家族を含めた多職種チームで検討しています。

院内活動では、高齢者ケアセミナーを開催したり、医療職ではない職種の方々にも高齢者の特徴や認知症を理解して対応できるように研修を行っています。また、院外からの講演や研修の依頼も増えてきました。これらの研修を通して、高齢者ケアを一緒に考えてくれる仲間が増えることは、大変ありがたく、心強く思います。

日本の超高齢多死社会において、人生の最晩年を生きる高齢者が一人の人として大切にされるよう、これからも老人看護専門看護師として多職種と一緒にがんばっていきたいと思います。



病棟の相談室にて

## 大学の1年間

## 行事\*\*\*\*\*

2015年	4月 7日	入学式
	4月 9日	定期健康診断
	6月26日	特別講演会「[ブラックバイト]って何?
	8月 8日～9日	オープンキャンパス
	8月27日	大学院博士前期・後期課程入学試験 (9月2日合格発表)
	9月 4日	編入学試験 (9月16日合格発表)
	9月12日	看護専門職公開講座 「看護におけるスピリチュアルケアースピリチュアルペインアセスメントシートの活用を中心に」
	9月14日	大学院特別講演会「質的研究のインタビューと分析」
	9月25日	大学院特別講義「授業案の立て方」
	10月17日	大学院博士前期課程(助産学実践コース)入学試験 (10月29日合格発表)
	10月28日	助産学専攻科特別講演会「助産診断と専門職性」
2016年	11月14日	あざみ祭
	11月21日	推薦入学試験(12月3日合格発表)
	1月16日～17日	大学入試センター試験
	1月23日	第17回国際フォーラム 「精神疾患をもつ人々への在宅ケアシステム～米国システムの紹介と神戸の現状～」
	2月13日	大学院博士前期課程入学試験(二次募集)(2月17日合格発表)
	2月25日	一般選抜入学試験前期日程 (3月7日合格発表)
	3月 5日	大学院オープンキャンパス
	3月12日	一般選抜入学試験後期日程 (3月20日合格発表)
	3月17日	卒業式
	～新年度予定から～	
4月 6日	入学式	
5月28日	あざみ祭・ホームカミングデー	
8月 6日～7日	オープンキャンパス	

# 人事

## 教員

<b>退職</b>					<b>採用</b>				
2015年	3月31日	植本 雅治	教授		2015年	4月1日	谷 知子	教授	
	3月31日	山根 加名子	教授			4月1日	山内 理恵	准教授	
	3月31日	内 正子	准教授			4月1日	岡 永真由美	准教授	
	3月31日	平尾 明美	講師			4月1日	福重 春菜	助教	
	3月31日	西山 忠博	助教			4月1日	花井 理紗	助教	
	3月31日	八木 哉子	助教			4月1日	石田 絵美子	助教	
						4月1日	和田 知世	助教	
					<b>昇任</b>				
					2014年	10月1日	片山 修	講師	
					2015年	4月1日	二木 啓	教授	
						4月1日	山岡 由実	准教授	
						4月1日	玉田 雅美	講師	

## 職員

<b>退職</b>					<b>転入</b>				
2015年	3月31日	森田 文明	事務局長		2015年	4月1日	丸一 功光	事務局長	
	3月31日	鎌田 亮	事務職員			4月14日	児玉 紫乃	事務職員	
						4月14日	畑中 真理	事務職員	
						4月14日	水島 弘子	事務職員	
<b>転出</b>									
2015年	4月14日	辺見 玲子	事務職員						

訃報 謹んで哀悼の意を表します。

2015年 5月4日 中西 睦子 名誉教授(初代学長)  
 2016年 1月13日 服部 雄一 教授(人間科学領域 自然科学分野)

### 平成26年度国家試験合格状況

	保健師	看護師	助産師
受験者数	78名	68名	15名
合格者数	78名	68名	15名
合格率	100%	100%	100%

### 平成26年度学部卒業生・大学院修了生

学部卒業生	79名
助産学専攻科修了生	13名
大学院修士課程修了生	10名
大学院博士課程修了生	2名

### 平成26年度入学生

学部1年次	95名
学部3年次編入	6名
大学院修士課程	16名
大学院博士課程	2名
助産学専攻科	15名

## オープンキャンパス 予告

2016年度のオープンキャンパスは2016年8月6日(土)、7日(日)に実施予定です。本学入学をお考えの方をご存じでしたらどうぞお声をおかけ下さい。詳細は順次本学HPなどに掲載いたします。

## 編集後記

時計台の側に広がる敷地には、卒業していく学生等が記念に残してくれた木々が植栽されています。最初は若く心細いような風情の桜木なども、今は地に根を張り、枝を広げ、力を増しているようにみえます。さて、『回廊』13号をお届けします。来る4月に開学から満20年を迎える本学の教育、研究について報じております。本学に集う人々が行き交う回廊から取ったその名に恥じないように、キャンパスと地域と世界をつなぐ、その時々の本学の様子をこれからも記録してまいりたいと思います。(広報委員会)

# 神戸市看護大学

〒651-2103 神戸市西区学園西町3丁目4番地  
 電話：078(794)8080(代表) FAX：078(794)8086  
 E-mail：soumuka@tr.kobe-ccn.ac.jp Web：http://www.kobe-ccn.ac.jp

